

### <研究>東京における繁華街の都市地理学的考察

今朝洞, 重美

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

9

(終了ページ / End Page)

20

(発行年 / Year)

1958-05-10

# 東京における繁華街の 都市地理学的考察

今 朝 洞 重 美

ここに繁華街とは、ショッピングセンターとアミューズメントセンターとを兼ねたもので、その実態は都市の規模や性格を大きく反映するはずであります。この報告は「東京」におきまして、繁華街が如何ような実態を示しているか、又それは、どのような意味を持つものであるか、について考察を試みたものであります。

磯村教授は、デパート、商店街、映画館、旅館の4要素が揃っている場所を、繁華街と考えておられますが、私は、「充実した商店街」と「大衆的娯楽施設」が揃っている場所を繁華街と考えました。所で「東京都商店街連合会」の意見によりますと、「50店以上の商店の集まったもの」を、充実した商店街と認めると言います。又娯楽施設としては、都調査の「娯楽施設利用人員、月平均数(S27)」によりますと、「映画館」が約750万人中の93%弱をも占めております。それで、「一館以上の映画館を伴う、50店以上からなる商店街」を、繁華街の最低条件としました。これに該当するものは、S、31年度には都内に156を数え、まづその分布図を作りました。所でこの156地区のうち、67は「大デパート」<sup>註(1)(2)</sup>と「高級映画館」を伴う、いわば大繁華街でありまして、それは、「新橋銀座有楽町から京橋日本橋に到る一連の地区」、「浅草」、「新宿」、「渋谷」、「池袋」、「上野」の6地区であります。今この6地区を他の繁華街と比較しますと、<sup>註(3)(4)</sup>、構成要素のバリエーションが著しく大きく、かつ各要素とも極めて高級なものから、大衆的なものに到るまで、広い巾を持つていること。次に、繁華街そのものが、一般商店を主とする地区と、娯楽享楽地区および喫茶飲食店地区に分化すると共に、更に夫々が高級な地区と、大衆的な地区に分かれていること。次にメインストリート以外の発達に殊に著しいため、線状のものは横巾を、塊状のものは半径を増し、いずれも平面形態は大形になりますが、更に2階以上の商店が激増するため、立体性が顕著になります。以上の諸点から、この6地区を他の群小繁華街から区別して、東京の代表的繁華街と致しました。以下、大繁華街群と群小繁華街群に分けて述べることに致します。

註(1)東京の範囲を考える時に次の3つの場合がある。(1)首都としての機能をはたしている、ほぼ旧市内に当る地域、(2)旧市内と郊外の新市域を合せた。現在の市内23区の全域、(3)衛星都市までを含めた範囲。本論文では(2)の立場をとつた。

先づ6大繁華街群は、その地理的位置からみて、江戸時代から既に都心部或は市街地に位置していた事が、当局の諸政策や都市計画と相俟つて、繁華街自身、独特の魅力、味合いを培かうまでに到つた。「銀座日本橋地区」および「浅草」、大震災以後、多くの郊外電鉄のターミナルといふ、交通上恵まれた位置にあることが、飛躍的發展をもたらした。「新宿」、「渋谷」、「池袋」、比較的小規模ながら、両者の場合を兼ねた「上野」、3群に分けられます。所で繁華街の個性は、そこに集まる人間層と密接な関係があり、この関係は更に繁華街の構成要素の上に、大きく反映していると考えられますので、商店街や映画館について次の作業を行ないました。

(オ1表)はT、3年からS、32年に到る間の「6大繁華街における映画館の分類表」で、(オ2表)は更にS32年度の実態の詳細を示したものであります。又(オ3表)は本年度デパートの分類表であります。等れも分類の基準とは「表」の(註)に示めてあります。(オ4表)は、メインストリートの各商店について、繁華街の質を示す指標となる諸事項を調査し、その結果をまとめてあります。即ち、「ショーウインド」は、各自の商店に対しましては言うまでもなく、特に繁華街全体にも豪華さを与えるものであります。この場合は店の規模や質が問題になりますので、参考までに、「売場面積」と従業員数の平均を付け加えました。次の「特徴、割引」等

註(2)繁華街地区決定の方法は、先づ「S、30年度、都商店街連合会名簿」、「都特別都市計画図」及び実地調査によつて「50店以上の商業地区分布図」を作成し、それに「映画年鑑」を使用してS31年度全映画館412の位置を記入した。また繁華街の範囲を考える場合、非商業地域の中に島状に形成されている場合には問題はないが、街道に沿つて長く連続している場合は、実地調査の結果、映画館のある附近が、多くの場合、喫茶飲食店類が集中し、比較的繁華になつてゐることを認めたと、この部分を中心に適當の長さで切つた。また縁辺の部分が入手状に伸びている場合は、商店の規模や質、人の流動状態などを参考に適當の場所で切り、一地区の範囲を決めた。

註(3)発生的には「銀座地区」と「日本橋地区」は別個に形成されたものであるが、近年東京八重洲口の完成に伴う京橋地区の急激な發展により、一統きの繁華街と考えても差つかえないと考える。又各種交通機関の便が極めてよく、距離の開きも容易に解決されている。

註(4)「大デパート」はまづ繁華街において「ショクピングセンター」として重要な意味をもつてゐる。その販売力をみると、例えば「渋谷東横」の1日平均売上高約3千万円は、道玄坂全商店のそれに匹敵している。また文化的催物類や屋上遊園施設、高級品の陳列などアミューズメントセンターとしての貢献も大きい。

また「高級映画館」についてみると、現在封切した映画は、洋画ロードショーは1ヶ月以内に一般封切館で、一般封切のものは和洋ともに2週間後には「セカンド館」で上映されているのであるから、高級館は一部の観覧者を対照としている。言はゞ贅沢なものである。従つて「大デパート」同様、特に多くの人の集中する場所に設けられることが、最も有利な条件と言える。

(オ1表) 大正3年より昭和32年に到るゝ大繁華街の映画館分類表

		大3	大14	昭5	昭17	昭22	昭25	昭30	昭32			大3	大14	昭5	昭17	昭22	昭25	昭30	昭32		
浅	洋画館	級	15	17	14	21	15	14	20	21	澁	級	0	4	5	10	9	7	11	21	
		1		1	1	1	2	3	3	4		1		0	0	1	1	1	1	2	6
		2		2	2	2	1	1	3	2		2		1	1	0	0	2	2	2	1
	邦画館	1		1	1	4	2	4	5	4	谷	1		1	1	1	1	1	1	3	5
		2		2	3	3	7	5	3	5		2		0	1	3	2	2	2	2	0
		3		8	5	9	3	1	2	1		3		2	2	3	5	1	2	2	2
草	ニユース									ニユース					1				1	2	
		級	2	5	4	17	15	18	33		36	池	級	0	2	3	7	5	8	20	25
		1		0	1	3	2	5	11		11		1		0	0	0	0	0	0	1
	2		1	1	0	2	3	3	2	2			0	0	0	0	2	2	2	3	
	銀座日本橋区	邦画館	1		2	1	1	0	1	3	5	袋	1		0	0	0	0	0	2	2
			2		0	1	1	3	3	1	4		2		0	0	1	3	2	3	4
3				1	1	7	7	5	9	4	3		2	2	3	4	0	3	5	7	
新	ニユース				3			2	4	ニユース										1	
		級	1	4	6	16	7	13	27		33	上	級		2	3	3	3	3	11	14
		1		1	1	2	2	2	4		7		1		0	0	0	0	0	0	1
	2		0	0	1	0	2	6	6	2			0	0	0	1	1	0	1		
	宿	洋画館	3		0	0	3	0	2	5	6	野	3		0	0	0	1	1	2	3
			1		0	0	3	1	2	3	6		1		0	0	0	0	0	1	1
2				1	2	2	3	2	3	2	2			1	1	1	0	0	2	4	
新	邦画館	3		2	3	4	1	3	4	4	ニユース	3		1	2	2	1	1	3	1	
						1			2	2									2	2	

(註) 1. 邦画は一般、洋画は知識階層、青壮年層を主な対象とし、ニユース館は人口流動の大きい所に設置される。

2. 1級館(高級館)は定席1000名程度以上封切館で施設完備、2級館は定席600名程度以上900前後、3級館は定席500名程度以下主として大衆料金のもの、ニユース短篇物専門館を含む。

3. 映画館1館開館のための背景人口は東京で約1.2万、京都で1.6万、東北地方は2.5万、福岡約8千。

(ホ2表) 昭和32年6大繁華街における映画館分類表

	総数	洋画	邦画	ニユース	ロード ショウ	洋画館			邦画館			洋名画 / 本 上 映	邦画 / 本 上 映
						1級	2	3	1	2	3		
銀座 日本橋	36	19	13	4	9	11	2	6	5	4	4	6	3
浅草	21	11	10	0	0	4	2	5	4	5	1	0	0
新宿	33	19	12	2	1	7	6	6	6	2	4	5	1
渋谷	21	12	7	2	1	6	1	5	5	0	2	4	2
池袋	25	11	13	1	0	3	3	5	2	4	7	1	0
上野	14	6	6	2	0	2	1	3	1	4	1	2	0

(註)

(1) 映画の上映には1本上映と2本または3本上映がある。特に名画1本上映館の客層は、洋画、ニユース館の場合に類似している。

(2) 洋画ロードショウ専門館はS、31年までは9館全部が銀座日本橋地区にあった。

(ホ3表) 昭和32年6大繁華街におけるデパート分類表

	総数	ターミナル デパート		ターミナルデパー トに準ずる		ターミナルデパ ートでないもの		
		規模	大	小	大	小	大	小
銀座 日本橋	11		1	1	1	0	6	2
浅草	1		1	0	0	0	0	0
新宿	4		0	0	2	2	0	0
渋谷	2		1	1	0	0	0	0
池袋	3		2	0	1	0	0	0
上野	2		0	0	1	1	0	0

(註)

(1) 「ターミナルデパートに準ずるもの」とは直接駅には直結していないが、位置がターミナル繁華街にあるもの。

(2) 小デパートとは3階以下で実用品、食料品を主として取扱い主に大デパートの支店であるもの。

(3) デパートの規模(大、小)および種類(ターミナルD、非ターミナルD)はデパートの質と大きな関係がある。次の表は都市主要デパートについてその差違の一端を示したものである。

※(次頁え)

※ (S31.8 現在、増築未完成の部分は含まない)

位置	デパート名	売場面積	一年売上げ高概算	商品の重点或は特長、その他
1. ターミナル・デパート	東横 渋谷	1,700坪	75億	一応高級品も備えるが、主力は家庭実用品、衣料、食料品
	上野松坂屋	1,170	70	中産階級の実用百貨、特に大衆的呉服、家具類、特売場に主力をそぐ
	西武 池袋	7000	25	家庭実用品、食料品、「良品廉価」を特にモットーとする。
	浅草松屋	7200	17	観光土産品、食料品特に菓子類、「廉価な手頃の品物」をモットーとする。
	大丸 (東横駅)	1,2000	50~60	京呉服、全国民芸品売場、食料品、衣服類
2. 非ターミナル・デパート	伊勢丹 (新宿)	1,1400	66	中産階級対称の実用品、婦人向呉服、食料品、「モードは新宿から、伊勢丹から」
	三越支店 (新宿)	5000	24	
3. 非ターミナル・デパート	三越本店 (日本橋)	1,9000	120	欧米流行の洋服類、舶来小間物、化粧品類、高級呉服、室内装飾品類、靴、帽子、洋傘、履物類、「婦人遊覧場」、「流行の最先端」
	高島屋 (日本橋)	1,6000	90	趣味の食器特に高級和食器が特長、婚礼用品
	白木屋 (日本橋)	1,6000	36	高級呉服、小間物、洋品類、輸入商品名、「よい商品を正しい価格」
	銀座松屋	10000	30	洋品、アクセサリー、ペーパーセンター、高級品をねらい安物をおかぬ、「欧米文化の粋を集めたデパート」「設備完全、建築宏壮」
	銀座松坂屋	9500	34	洋品アクセサリー、洋陶器、家具類
	銀座三越支店	3300	18	

(オ4表) 6大繁華街メインストリート商店調査(昭和31.8調査)

	調査総店数	シをヨウした店数	比率%	シをヨウしたくない店数	比率%	シをヨウしない店数	比率%	シヨールーム数	一店と隣一階まで使用している店数	全国的有名店	銀座に出しても通用する店数	画廊	特売割引の札をさげている店数	比率%	売場平均面積(坪)	従業員平均数(人)
銀座日本橋	376	355	90	15	30	26	52	11	64	31		5	11	27	28	242
新宿	126	97	769	18	142	11	89	0	7	0	13	0	31	246	17.1	17.6
渋谷	138	90	652	36	260	12	88	0	2	0	11	1	32	23.1	11.8	83
池袋	138	86	623	44	319	8	58	0	2	0	4	0	37	282	8.5	56
上野	98	62	632	22	224	14	144	0	3	0	7	0	29	295	13.7	128
広小路東側	61	36	59	19	31	6	10		3				26	426		
〃 西側	37	26	70	3	8.1	8	119		0				3	8.1		
浅草仲見世	100	54	54	46	46	0	0	0	0	0	0	0	34	34		
浅草新仲見世	125	60	48	42	336	18	184	0	0	0	0	0	64	512	11.1	7
浅草区役所通	43	38	883	2	46	3	7.1	0	0	0	0	0	2	46		

の広告を掲げる方法は、高級な商店ではまず普段は行なはないものであります。このほか、全国的に名の通った商店の有無、「銀座日本橋地区」に出しても見劣りがしないと判断した店の数、一店で1、2階とも売場として使用している店の数等、調査致しました。なお以上のほか、各繁華街の実態調査図を作成致しました。以下6大繁華街を、各群別にのべて参ります。

才1に、「銀座日本橋地区」と「浅草」について、T、3年、「浅草」は市内映画館の $\frac{1}{5}$ に<sup>註(1)</sup>当る15館を集め、これに「芝居寄席」を合せた、23の施設は、当時東京最大の<sup>註(2)</sup>アミューズメントセンターを形成、S、17年においても、「浅草」の「21映画館」に比肩しうる場所は、他にありませんでした。一方、「デパート」については、T、3年日本橋には既に「三越」、「白木屋」、「高島屋」の大デパートが開かれておりましたが、「浅草」にはまだ一店もなく、S、4年に到つて、ようやく「浅草松屋」が開店致しました。所がその時、「銀座日本橋」地区には、既に「松坂屋」、「松屋」が加り、更にS、6年には「銀座三越」が新設されました。このことは、「浅草」の機能が、ショツピングセンター以外にあること、および、大繁華街として、一つの弱点をもっていることを意味しております。所で現状をみますと、「銀座日本橋地区」が、映画館(36)、デパート(11)を擁し、都内、更に日本最大の集中を誇っておりますのに対して、「浅草」は依然映画館(21)、デパート(1)をもつにすぎず、規模の開きは誠に顕著であります。次に性格や質の面を比較考察致します。先づ映画館について観察しますと、(1)銀座日本橋地区は、洋画館とニュース館が全体の $\frac{2}{3}$ で(23)館をしめ、又高級館が(16)館で「半数」弱、このうち(9)割は洋画館であります。但し、「浅草」では、洋画、邦画共に半々の普通の比率で、高級館も(8)館にすぎません。(2)前者では都内のロードショウ(11)館中(9)館を集め、特別高級料金制をとる館が(11)もあります。後者では只(1)館であります。(3)3級館でも、前者の場合は名画1本上映館およびニュース館であります。後者では全部2本上映館で、ニュース館はありません。以上の差違は演劇方面でも同様で、「銀座日本橋地区」に高級劇場のほとんどが集まつておりますのに対して、「浅草」では国際劇場の外、等れも低料金の大衆劇場のみであります。次に「デパート」についてみますと、「銀座日本橋地区」は、都内大デパートの半数以上をもち、これらは皆、厚い信用と独自の魅力を持つことによつて、ターミナルデパートを越えて顧客を吸引しており、商品の種類や質に対する重点の置き方、陳列や装飾の方法、諸施設や催物類は、例え売上高の上では「ターミナルデパート」に及ばなくても、絶対的な優位を誇っております。更に(才4表)によつて商店街をみましても、銀座の高級店に相当するような店は、他の(5)大繁華街には極めて少なく、殊に「浅草」には、一店も見当りませんし、又全日本に名の通つている店は、「銀座日本橋地区」のみに集中しております。又「ショーウィンドウ」を持たぬ店も、「特価割引販売」を行なつている店も、「銀座」では共に(3)%以下で、これも、輸入食料品店と、払下処分品店で、専門店ではありません。一方「浅草」では両項目とも6地区中最も多く、40%以上を占めております。また、大商会の「ショールーム」も「銀座日本橋地区」だけにしかみられぬこと。2階建およびそれ以上の商店が多いこと、殊に常設の美術館、画廊などを繁華街のなかにもつているこ

となども「銀座日本橋地区」以外にはみられぬこと。以上観察の結果は、「銀座日本橋地区」は近代的であり、高級であり、「浅草」は最も大衆性が顕著であること、更に「銀座日本橋地区」に比肩し得る繁華街は、他に存在しないことを、明白に示めております。

次に、「新宿」、「渋谷」、「池袋」について。

この3繁華街の後背地は、質的に異なるところはありませんが、その住宅地としての開発に遅速がありました為、「新宿」が最も進み、「池袋」が最もおくれております。先づ「映画館」について観察致しますと、(1) 3地区とも飛躍的に増加を行い、現在既に「新宿」は「浅草」を凌ぎ、「渋谷」「池袋」は「浅草」と伯中する状態になっております。(表5)は、その分布および増加の状態を示したものでありますが、3繁華街いずれも数ヶ所に群を作っております。実はこれらの繁華街は、かような映画館群を新しい核として、漸次発展してしたのであります。(2) 3地区いずれもニュース館をもっておりますが、「新宿」、「渋谷」は洋画館の比率が高く、「池袋」(表5) 「新宿」「渋谷」「池袋」における映画館群、及び館数の増加表。

年度	新 宿			渋 谷			池 袋					
	T./4	S./17	S.32	T./4	S./17	S.32	T./4	S./17	S.32			
映画館群数	2	2	5	2	4	4	2	3	5			
映画館数	4	16	33	4	9	21	2	7	25			
場 所 館 数	新宿3丁目	2	8	10	百軒店	3	3	3	池袋一	1	4	6
	角筈1丁目	2	7	10	道玄坂	1	2	4	池袋西口	1	2	8
	歌舞伎町	0	0	11	神宮通栄通	0	3	8	池袋東口	0	1	8
	駅東口	0	0	1	上通二	0	1	6	雑司谷五	0	0	2
	駅西口	0	0	1					池袋西駅前	0	0	1

(註) 映画館が増加する場合既存映画館群を充実して行く一方新たな映画館群を作つてゆく。これが繁華街の発達拡張の大きな原因動機となる。

註(1)「日本橋地区」は幕府により5街道の起点に位置する江戸最大のショツピングセンターとして建設され、「銀座地区」は明治政府により、近代日本のシンボルとして、最初の洋風街路の設計が行はれた。また「浅草」は既に「浅草観音」の門前町であつたのが、幕府の風規緊縮政策の度に、遊廓、芝居小屋などが集められ、一大アミューズメントセンターが形成されてきた。元來東京の古い繁華街は、人形町における水天宮、上野における寛永寺、神田における神田明神、門前仲町における深川不動等々……、発生時、社寺との関係の深かつたものが多かつたが、現在なおこの関係を持続させているものは、「浅草」のみといつてよい。このような発生当時の伝統は、両繁華街において現在なお生きている。

註(2) T、3年、また映画館は観覧施設の約35%にすぎず、昔からの芝居、寄席が大きな意味をもつていた。S、31年と比較したのが次の表である。

	映画館	芝居	寄席	ストリップ	
T、3	49	21	68	0	(東京市内)
S、30	412	8	7	8	



は和洋半々の率であります。(3)「新宿」が最も高級館が多く、「渋谷」「池袋」より館数はやや少なくとも、高級館は「池袋」の2倍以上であります。(4)「池袋」は3級館が約半数を占め、然も「新宿」、「渋谷」の3級館が大半/本上映の名画館でありますのに対して、「池袋」は全部2本上映館で、施設も劣っております。(5)封切料金も、「池袋」だけでは他の繁華街よりも安くなっております。以上の諸事実は「新宿」と「渋谷」の差よりも、これらと「池袋」との差が大きいことを示していると考えます。

次に(オ4表)によつて、商店街の比較を致しましても、3繁華街の質的差違は明瞭であります。特に「池袋」の店のショー・ウィンドウには、前面の一部分だけに「ガラス」を使用した粗末なものが多く、「新宿」や「渋谷」にみる程度の豪華なものが極めて少ないことが目立っております。又「新宿」が優位にありますことは、(オ6表)に示しましたように、名店老舗の支店数が、銀座に次いで多いことによつても、明らかであります。

(オ6表) 6大繁華街における支店の数および本店の位置(S31.8)

	数	本店の所在地および数
銀座	40	銀座(18) 神田(4)浅草(3)上野(3)人形町(2)日本橋(1)新宿(1)赤坂(1)麻布(1)高橋(1)
浅草	16	浅草(10) 上野(2)神田(2)人形町(1)日本橋(1)
新宿	20	銀座(1) 日本橋(4)神田(2)人形町(1)上野(2)浅草(2)新宿(1)渋谷(2)目黒(1)
渋谷	3	銀座(2) 渋谷(1)
池袋	7	銀座(2) 渋谷(2)人形町(2)上野(1)
上野	8	銀座(1) 高橋(2)上野(2)神田(2)人形町(1)

註1. デパートの名店街 老舗街 のれん街は含まない。

2. 銀座の店は出来るだけ銀座内に支店を出すことを望む又浅草以外の大繁華街には出している。

オ3に、「上野」について。

「上野公園」、「東、北部の郊外住宅地帯」、更に「北日本」と、複雑な後背地を持つ上野は、繁華街としての発生は古いが大繁華街を形成いたしましたのは、極めて新らしく、高級映画館を含む増設をみましたのは、S. 25年以降のことです。いまその内容をみますと、全館の比率は和洋半々、又高級館も少なく、一方、「寄席、演芸場」2つを、未だに存続させております事と相待つて、「浅草的性格」を示しております。しかしこれは又、ターミナル的性格を示す。=ニュース館(2)をも含んでおります。次に商店街をみますと、「上野広小路」の両側に、性格の異なる3列の地区があります。オ1列は、西側の、江戸時代からの名店、老舗や、比較的高级な「料理喫茶店」等の並ぶ、小規模ながら、日本橋附近を思はせる地区、オ2列は、東側の大衆的性格の濃い地区で、両地区の対照は(オ4表)からはつきり読みとれると思います。オ3列は、この裏通りにある、戦後の「ヤミ市」から転じた、雑然たる「おろし屋兼小売店街」で、これは「東京駅名店街」と全く対照的に、安い田舎向土産物品を専門に販売しております「上野デパート」の存在と共

に、「北の玄関」としての一面をよく語っているものと思います。

以上6大繁華街の性格について考察致しましたが、いまその実態を發展史的にみますると、先にも角にも繁華街がそこに集中する人の数に依存しております以上、交通機関との関係が極めて密接であることは言ふまでもありません。即ち、まだ東京が主に旧市内に限られていました時代には、大繁華街は、市電の便もよい「銀座日本橋地区」と「浅草」だけでよかつたのですが、震災以後、現在に到るまでの膨大な人口増加が、郊外交通機関の充実發展を背景に、その沿線を中心に行なはれ、又近年は衛星都市も増加して参りましたため、直接これを背景に形成されましたターミナル繁華街群は、一つには都心繁華街の代用地として、二つには日常生活上の必要をみたす場所として、規模的にも、質的にも、急速度に發展をとげて参りました。これは最近、「名古屋」、「福岡」などにおいて、駅前の繁華街が目覚ましい發展をみせておりますこと、更に「銀座日本橋地区」のような都心繁華街におきましても、現在、發展の中心が主として「東京駅八重洲口」、「有楽町」、「新橋」などの駅前附近にありますこと、理を同じくするものであります。しかし、ターミナル繁華街群の發展の場合には、一つの限界があるようで、前述の諸調査の結果からも分かりますように、いずれも「銀座日本橋地区」的方向に向つて、漸次進みつゝはありますけれども、「高級性」の程度におきましては、画然とした開きがあります。こゝに全東京、さらに全日本を後背地としている「銀座日本橋地区」の優位性がありますわけで、この繁華街のもつている新旧の高級的要素も、歴史的に育成されてきたものでありまして、新興の繁華街には容易には形成されえないものであります。従つて、「新宿」その他にみられます名店老舗の類は、いずれも、都心繁華街または旧市内に本店を持つている店の支店か、デパート内にあります「のれん街、名店街、老舗街」であります。この点、「銀座日本橋地区」と「新宿」、「渋谷」、「池袋」との間には、本質的の差違があると言えましょう。又「浅草」のように、ショッピングセンターとしての高級性も乏しく、交通機関の中で、最も利用度の高い国電の沿線からはすれ、更にターミナルとしても小規模な繁華街は、他の交通便利な位置に形成されております繁華街群が、充実發展すればする程、アミューズメント的要求もそこで満たされうる面が多くなりますわけで、例えば「浅草」の映画館の増加が、震災後ほとんど停止しております事実や、小林一三氏が、「浅草」と「江東方面」との中間にあり、交通の便に恵まれております「錦糸町」駅前に「江東楽天地」を經營し、浅草への客をこゝで吸収いたしましたことの着眼のよさなどは、「浅草」の地理的位置のもつ点をよく語っているものと考えます。この点、2重のターミナル位置してあります「上野」の場合は、後背地とする郊外地域の開發は戦後から本格的軌道にのつたばかりでありますし、また「玄関」と云う言葉が、こゝほどびつたり致します場所はほかにはなく、かなり恵まれていると言えましょう。

次に群小繁華街群について申し上げます。これは数量も膨大でありますし、また規模や性格などをみましても個別差が著るしいため、明確な分類の基準を見出すことは極めて困難と考へましたので、試案として、構成要素、分化の状態および、形態などを綜合致しまして、次の3階級に分類してみました。いま前にのべました6地区を「1級繁華街」としますと、「2級繁華街」は、「小

デパート」と「高級館」の両方、または一方をそなえたものか、或は2級以下の映画館でも、著しく館数の多いもので、地区の分化および、「メインストリート」以外の部分の発達が相当進んでいるものをえらびました。これに該当いたしますものは、「五反田」、「大井町」、「大森」、「蒲田」、「錦糸町」、「神田」、「人形町」の7地区で、その位置は、いずれも京浜から下町に到る商工業地帯の中にあります。しかしこのうち、「五反田」、「大井町」、「大森」、「蒲田」は、更に郊外住宅地として最も早く開けた西南台地面を、直接背後にひかえるか、又はこれを貫ぬく電鉄のターミナルに当り、「江東橋錦糸町駅前」は映画館10を中心にして各種の娯楽施設を網羅しております江東楽天地を、「神田」は学校群を「人形町」は伝統的な大問屋街群を背景としておりますように、かなりローカルにはなりますがなおいずれも地元以外の後背地をもっているのが特長であります。次に「3級」と「4級」の繁華街は、「デパート」も「高級館」も持たぬものであります。が、「3級繁華街」は、地区の分化が一応行なはれ、メインストリート以外の部分の発達も、或程度進んでおります。これに該当するものには、「中野」、「荻窪」、「武蔵小山」、「自由が丘」等のように、開発の早い西南台地面や中央線沿線の駅前に発達したもの、「北千住」、「赤羽」、「王子」等のように、旧宿駅で工業地帯内の駅前に発達したもの、更に「麻布十番」、「神楽坂」等のように、古い伝統をもつ繁華街等があります。「4級繁華街」は、繁華街の最低条件をみたしている程度のもので、まだ地区の分化は行なわれず、メインストリート以外の発達も極めて貧弱であります。これらは、旧市内で市内電車の便のよい所に位置しているものと、郊外電鉄の駅前に形成されているものとあり、いずれも、せまい範囲を背景としているものであります。今、T3、T14、S17 各年度の繁華街分布図を作成してみますと、旧市内のものは、ほとんど震災前<sup>註</sup>からすでに存在しており、新市域のものは震災後加速度的に形成増加を行なつたものでありまして、現在みられます分布の粗密は、住宅地としての開発が、西南部から西北部、更に東北部、東部へと、漸次左廻りに進められたことを大きく反映していると考えます。

最後に、人口数の異なる他の都市における繁華街の規模を、東京の級別繁華街の夫々に対比せしめてみました。ところで東京の場合には、人間の層や生活程度におきまして、地方都市に比し上下

註、繁華街決定の方法は、当時の商店街名簿がないため、陸測の地形図を参考に、各時期の商業地区分布図を作成、これに全映画館の位置を記入、更に文献を参照して繁華街の位置を決めた。なおこれによつて、現23区の範囲内における全繁華街の増加状況をみると次表の如くであります。たゞT3年新市域の7地区は、旧宿駅か社寺と関係の深い古くからのもので、東京の一部として形成されたものではありません。

	T. 3	T. 14	T. 17	S. 31
旧市内	33	36	36	33
新市内	9	48	73	123
計	42	84	109	156

高低の巾が著しく大きいため、繁華街の構成要素の内容に地方ではない高級なものが存在しておりますし、また地方都市の繁華街は、都市周辺の地域からの来集者をも多数、対照としております関係上、むしろ、「ショッピングセンター」的機能が大きい傾向があります。例えば八代市(6.9万)は、やゝ大きな「小デパート」1映画館3熊本市(29.2万)は、「大デパート」2「小デパート」2「映画館」10と、都心繁華街におけるアミューズメント的要素が、東京の場合にくらべましてかなり貧弱なように思はれます。従つて、内容の差違よりも規模の程度に重点をおき大まかな対比を行なうことに致しました。

まず最小の都市である、人口1万前後の「町」のもつ繁華街をみますと、これは「東京」の4級程度のものに相当致します。これが5万前後の「小都市」になりますと、3級程度のものをもつようになりますが、10万前後から40万程度の、いわゆる県庁所在地級の大、中都市になりますと、2級ないしは「池袋」程度の1級繁華街に準ずるものが、都心に形成されますほか、4級程度の小繁華街が、一、二駅前などに作られております。しかし、大工業地帯を背後にひかえております「福岡市」(49.3万)は、「大デパート」2に対して「映画館」22、北海道の首都「札幌市」(37.9万)は、「大デパート」2に対して「映画館」20と、アミューズメント的要素が、かなり増加し、繁華街も殊に「福岡市」の場合は、「新宿」に準ずる程度のものを形成しております。

ところで、更に100万以上の、いわゆる100万都市になりますと、都心の大繁華街はかなり高級的要素を増し、例えば「京都」の「河原町通り」や「四条通り」、「大阪」の「心斎橋筋」などのように、小規模ではありますが「銀座日本橋地区」的性格を、はつきりと現はしてくるようになります。(オ7表)は、100万都市における繁華街の一覧表であります。これをみますと、(1)「京都」、「名古屋」の場合には、都心に1つ大繁華街が形成されているだけで、それは「ターミナル」的性格はもっていない。(2)「大阪」に到り始めて3つの大繁華街が形成されてきますが、いずれも「ターミナル」的性格を持つている。(3)「梅田」を除いたほか、いずれも

(オ7表)「東京」「大阪」「名古屋」「京都」の各都市における繁華街一覧表  
(昭和31年8月現在)

都市	人口万	大繁華街所在地	デパート数	映画館数( )内 高級	ターミナルに 当るもの	小繁華街数
京 都	110.5	新京極河原町通四条通	2(大)	23(11)		約30
名 古 屋	129.6	広小路 大須	2(大)	28(8)		約38
大 阪	244.2	心斎橋道頓堀4日前難波	4(大)	27(13)	難 波	約89
		梅 田	2(大1小1)	11(5)	梅 田	
		新世界 天王寺阿倍野	1(大)	18(5)	天王寺阿倍野	
東 京	77.6	銀座 日本橋	9(大7小2)	33(16)		157
		浅 草	1(大)	20(8)		
		新 宿	3(大2小1)	33(12)	新 宿	
		澁 谷	1(大)	20(10)	澁 谷	
		池 袋	2(大)	24(3)	池 袋	
		上 野	1(大)	11(2)	上 野	

発生、性格を異にする繁華街が結びついて、いはゞ「複合大繁華街」をつくっている。(4) 小繁華の数がかなり増大している。以上の諸点が注目されますが、今改めて「東京」における繁華街の実体を振り返ってみますと、東京のように「異なつた性格をもつ大繁華街を多数形成しており」また「小繁華街群の発達も顕著」な都市は、他に類例がありません。このことは実に「首都」としての「東京」の巨大さと複雑さに基づく結果であると考えます。

## 秋田県鹿角盆地の農業地理学的研究

石 川 雄 造

### 一 序

東北地方は一般に日本農業の発達過程において立ちおくれた地方とされている。この立ちおくれた東北地方の北部に位置する鹿角盆地は、米代川の上流部にある山間盆地であつて、自然条件にも恵まれていない。気温も県内では最低であり、長期間積雪もある。土地条件は悪く、排水不良地や鉦害地もあつて土地利用上甚だ不利である。

以上のような劣悪な諸条件の中にあつて、鹿角盆地の農業がいかなる発達をとげてきたかを考察する為に、経営規模、土地所有の変化、反収や作付面積の変動、農業技術の発展状況について検討し、さらに農村変貌の実態を明らかにする為に、臨時農業基本調査を利用し、盆地内を6つの型に大別し、その1つの型である平地農村の水田単作地たる鏡田部落を選定し、農業経営の変遷について考察することとした。

### 二 鹿角盆地の農業地域の考察

#### (1) 農家経営規模と土地所有の変化

戦後における農業基礎構造について基幹的役割を演じたのはいうまでもなく農地改革である。ここでは農地改革の本質的な意義はさておいて、農地改革によつて農家戸数および経営規模がいかに変化したかを考察する。

農家戸数は戦前より戦後に増加しており、才1表はその変化を示したものである。このように農家戸数が戦前より戦後に増大したことは全国的な現象であるが、農家戸数の増加の中にあつて、その経営規模別はいかに変化したかを考えることは重要である。

そこで、農地改革前という意味で昭和21年、改革後を同25年として、各年次における経営規模を整理したのが才2表である。この表を検討してまず気が付くことは、1町歩を境にして、1町以下の零細農が増

才1表 鹿角郡の農家数

昭和	数字	総数
17年	46	41戸
19年	46	31戸
21年	47	10戸
22年	48	09戸
25年	50	48戸

秋田統計年鑑